

心的因果は不可視的であるか

海田大輔 (Daisuke KAIDA)

京都大学

ここまで高崎と山口が検討してきた、自由意志問題に関するロウの見解（リバタリアニズム）が、物理主義と折り合いのつきにくいものであることは、容易に予想されるだろう。じっさいロウは、はっきりと反-物理主義にコミットし、「非デカルト的実体二元論 (Non-Cartesian Substance Dualism)」を標榜している。これは、心的実体と物的実体とをたがいに別個の実体とみなすという点で「実体二元論」であり、心的実体が（心的性質以外に）物的性質をも担うると主張する点で「非デカルト的」である。ロウは、この非デカルト的実体二元論にもとづき、いかにして心的原因が物理的結果を引き起こしうるのかという問題（いわゆる心的因果の問題）に、ひとつの（というより、じっさいは「一群の」）解決策を提示している。本発表では、ロウの非デカルト的実体二元論および彼の心的因果に関する見解を整理し、これらを彼のリバタリアニズムと整合的に理解する道筋を示したい。

ロウの見解の際だった点は、心的性質が「新奇な」因果的力を持つことを主張する一方で、このことが因果的閉包性原理の破れを必ずしも含意しないことを強調するところにある。彼によれば、非デカルト的実体二元論は、物理主義者が手に入れるすべての経験的証拠と完全に両立可能であり、その意味で「自然主義的」と呼ばれる。すなわち、彼の言葉を用いるなら「心的因果は不可視的 (invisible) である」ことになる。発表では、とくに、心的因果の不可視性を示している（とロウの考える）モデルを検討し、このモデルにおいてヒューム主義的な因果概念が暗に前提されていることを指摘するとともに、ヒューム主義的でない因果概念を採用したときに彼の議論がどこまで有効性を持つのかを探ることになるだろう。

[Reference]

Lowe, E. J. (2008) *Personal Agency – The Metaphysics of Mind and Action*, Oxford: Oxford University Press.